

ひがしの

1月号 東野小学校報 No.11

あけまして
おめでと
うござい
ます

昨年は保護者の皆様、地域の皆様にはたいへんお世話になり、私たち職員は気持ちよく仕事に集中することができました。今年も子どもたちとともに、「活気があり、規律のある学校」を作っていきます。昨年同様のご支援を賜りますよう、よろしくお願いします。

モーツァルトに演歌は作れない

(茂木健一郎「感動する脳」より)

校長 青山龍三

以前、脳科学者 茂木健一郎氏の講演があるというので、事前に氏の著書を読みました。

人は生きていの中で、多くの人や美しい景色・物に出会い、おいしいものを食べ、それらに感動を覚えることでキラキラとした人生を送っています。そして、新しいことや美しい物を見て感動することで、一人の人間として“新しい見方”を獲得していきます。それが創造性へとつながり、より深い感動ができるようになります。その創造性の源になるが意欲です。意欲が脳の機能を高めることも最近の研究でわかってきたといえます。

創造と簡単に言いますが、どんなに新しいものでも必ず元になる体験や知識が必要です。

ベースとなるものがないと

ころから新しいものは生

まれません。いかなモ

ーツァルトでも聴いたこと

のない演歌は作曲できな

いということです。だから、今学校で勉強していることは、将来の創造性の基盤となる知識や体験なので、とても大切なのです。

話は変わりますが、遺伝について。遺伝だから仕方がない、DNAは変えられないから、と

思い込んでいる人は多いと思います。しかし、それはある意味、間違いだそうです。私自身、遺伝だから・・・と納得してしまうことが過去に多々ありましたが、そうではないということです。実は環境によってDNAの発現がコントロールされているというのです。つまり、DNAが体の中にあっても、それが目を覚ますためには環境の刺激が必要で、その刺激がなければそのDNAはないと同じことになります。その刺激こそが“感動”であるということです。



よく学校では、「他の人の気持ちを考えた行動をしよう」と話し、指導します。自分以外の人の気持ちを考えるとき、その表情や仕草から相手の感情を推測することが多いのではないのでしょうか。ところが現実にはそれほど簡単ではありません。とてもつらいのに楽しそうな表情をするときがあります。いつもポーカーフェイスである人もいます。このように、相手の内面を推し量ることはとてもたいへんです。しかし、この能力を持っているのは人間だけだと思います。犬や猫、知能が高いと言われるチンパンジーでさえ、自身の内面と違う表情や行動はしません。人間は、感情と表情に食い違いがあります。それを推測するのですから容易ではありません。自分の体験や相手の性格などから相手の微妙な心のニュアンスを推理するには、抽象的・論理的思考能力が必要になります。従って、他人の心を推測する能力を高めようとするれば、抽象的・論理的思考能力を高めることが必要になります。

私たちの脳は蔵書がいっぱいある図書館といえます。しかし、その図書館は使わなければ意味がありません。脳には完成品がない、100歳になってもまだ成長し続けるといいます。私たちはいくつになっても感動することで、目覚



めていないDNAを発現することができます。冬の夜空、読書、やりきったときの喜び、いくらでもまだ感動で成長ができるのです。

